

「コレ〜。あんな近い所はあかん。殊にあの濱側に御親類が一軒あるのや、見附けられたら何ないするのや。もつと上へ遣り。高麗橋の詰へでも絡がしといて、俺しや後で直き往くさかい」

「ホンなら次さん、待つてまつせ」

幫間を先きへ遣といて、四ツ目の辻を右へ二筋程這入ると、一文菓子と焼芋を賣てる家がムります。

「お婆ん、島渡邪魔するで。……………」

狭い梯子をギイ〜鳴らして、二階へ上りますと、茲に篋笥が一棹預けたアる。今迄着て居た木綿物をスツカリと脱いで仕舞ふて、目の細かい天竺金巾に八王寺の襟の附いた肌襦袢。上へ着る長襦袢と云ふのがわざ〜京都へ誂えた別染の羽二重で、小豆茶に大津繪の一筆書きを散らしたと云ふ粹な物で、羽織から着物持物に到るまで、一分の隙も御座りまへん、細鼻緒の贅澤な雪駄を突掛けて、

「島渡其邊まで往て来る依て頼むで。……………」

高麗橋まで来て見ると、立派な屋形船がデーンと着いて居りまして、中にはお茶屋のお女將から藝妓幫間の連中がキヤア〜騒いで待つて居ります。

「ア、次さんが来てやつた……………」

「マア次さん晚いやおまへんか……………」

「何して、だんねナ。こないせんど待たして」

「コレ〜。もうチト靜かに出来んか。…………ア、イヤ〜迎えに來いでも宜えと云ふたら。…………船頭はん、チョツと手持つてんか。あゝヨイトシヨと…………お前等何ふした事やいな。大當然で往く花見や無いと彼れ程云ふたアるや無いか。さう其邊等の障子明け開けたら船の中が露出や。皆閉めて仕舞ひ」

「閉め切てお酒飲たりしたら毒だつせ。一寸程明けときまよか」

「不可ん〜。ピタツと閉めとくのや。それから餘り大きな聲出しなや。暫くは成るべく物言はん様に。」

「まア嫌ひ。全で三宅島行の船やワ。船頭はん早ふ出しとくなはれ」

「ヘエ今出します。オーイ絡網は宜えか。ヤう〜んとしよウ」(下座唄川宇治の芝舟……………)

周圍をキツチリ閉め切て船が動き出しますと、幾分か安心が出来ます、東横堀を北へ突抜けて大川の真中へ出ると少々位の聲は人に聴かれる心配がムりまへん。

「次さん。もう大川へ出てまつせ。少ふし位障子明けたら……………」

「不可んと云ふのに。岡からは見えいでも、船同士摺れ違ふた時に、どんな知たお方が乗てはるや解らへん。今日は一切明ける事は成らん。……………」

「そんな事云ふて向ふへ着いたら、どないして花見まんねナ。」

「其んな物見いでも宜え、匂ひだけでも嗅いでたら宜えのや。強て見度かつたら、障字に穴明けて覗